

△ 巻頭言 △

かんしゃく

藤原 正彦

長男は一歳の頃、かんしゃくをやたらに起こした。

何か氣に食わぬと哺乳びんを放り投げたり、金切声をあげたりした。どうしたものかと、女房と長時間にわたって話し合ったが、なかなか納得のいく結論が出ない。時にはうっかり私が、「かんしゃくは君の血じゃないか。幼い頃かんしゃくを起こしただろう」、などと口を滑らし乱戦模様になったりもした。

女房の専攻した発達心理学も、こんな時はほとんど頼りにならない。手許にあったホワイト博士の育児書を開くと、「かんしゃくを放置すると自制力のない人間に育つから、決して許してはいけない」、という趣旨のことが書いてある。私はなるほどと思うし、育児書にやや懷疑的な女房も、迷いを深める。念のためと

書店で別の育児書を見たら、「かんしゃくを起こしたら、おさまるまでじっと抱きしめてあげなさい」とある。

矛盾する処方せんにすっかり混乱した私は、同じ大学に在る専門家のH教授に、伺ってみることにした。私の話を聞いた彼女は、なぜかケタケタとしばらく笑い続けた。そして、「育児書はみな違うことを言っています」とおっしゃった。ややあきれた私が、「矛盾することが書かれていて、いったい育児学は学問と言えるのですか。理論はないのですか」、と言うと、「はい数学とは違って、理論も公式もありません」と平然とおっしゃる。「それでは親はどうしたらいいんですか」、となかば抗議調で問うと、「夫婦でよく話し合っ

て、最もよいと思った方法をとるのがよいと思いますよ、と振り出しに戻すようなことをおっしゃって、またケタケタと笑われた。

帰宅して女房に伝えると、肩の荷が軽くなったような表情を見せたが、私の方はかえって重くなった気分だった。「決して許さない」というのは、子供の気持ちも尊重したい、という女房に斥けられ、「じっと抱きしめる」、は私が拒否した。せっかく牛乳を温め、哺乳びんに入れ、手渡したとたんに投げ捨てられたりすれば、こちらの腹の虫が治まらない。

結局は統一方針を持つに至らず、それぞれが自分の流儀で対処することとなった。私は、「張り飛ばしてから抱きしめる」にした。女房はいろいろ話しかけたら、相手にしなかったりが多かった。

現在、長男は小学校六年生である。我々の仕方がよかったのかは、今もこれからも分からない。別の仕方をとればどうなったか、知りようがないからである。

ヒットラーの如き人間が、一万人位の子供達を集め

て、十数年にわたる非人道的実験を行えば、どんな子育てがどんな大人を作るのか、因果関係がかなり解明されるのだろうが、酷すぎてヒットラーにも実行出来まい。

たといいつの日か、何らかの方法で因果関係が解明されたとしても、親は何を選択してよいか困るだろう。自制力が強ければ強いほどよい訳でもなく、やさしいほどよい訳でもないからである。

たとえ苦しい選択をしても、プログラム通りに実際の子育てをするのは、環境要因が複雑過ぎて至難の技だし、万が一実行できても、子供により同じプログラムに全く異なる反応をする場合もある。そもそもそうやって子供を鑄型にはめよう、という発想自体も容認したい。

H教授は、今頃になって私が気付いたこれらのことを、全て見通した上で、かんしゃくの公式を性急に求める数学者のかんしゃくを、ケタケタ笑ったのだろう。

(お茶の水女子大学理学部数学科)